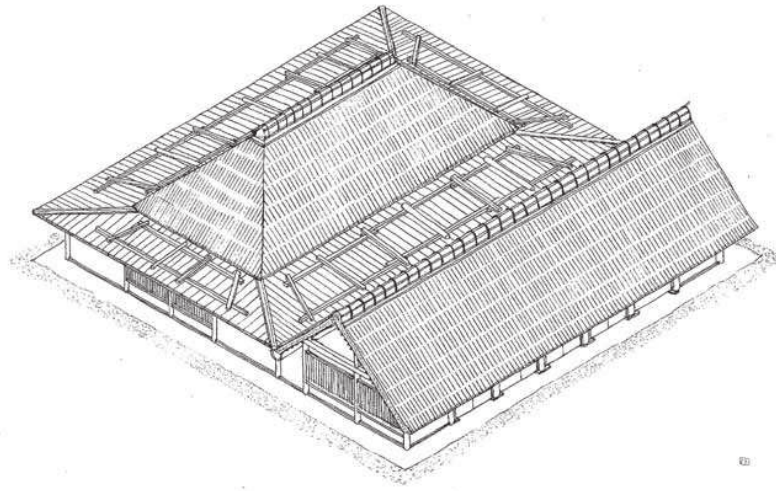


古代寺院から探る2棟の姿



箱崎和久氏によるSB01・02復元図
(身舎寄棟造案)―平成29年度国指定
史跡鳥海柵跡シンポジウム資料より

考察 全盛期の中心的建物

2017年度シンポジウムより

金ヶ崎の国指定史跡 鳥海柵跡

11

パネル討論要旨 Ⅲ

古代寺院には、正堂と礼堂のような前後に建物を近接させて建てる。いわゆる双堂と呼ばれる形式の建物が、法隆寺食堂・細殿や東大寺法華堂

だけではなく、ほかにもあることが文献から知られる。

「法隆寺伽藍縁起并流記資財帳」という747年に書かれた法隆寺の財産目録では、食堂・細殿は、「貳口政屋」とあるものに相当する。食堂は長さ7丈、広さ3丈3尺、細殿は長さ6丈8尺、広さ1丈8尺で、ほぼ同じ長さ(間口)の二つの建物が近接して建っていることが記されている。

「西大寺資財流記帳」(780年)では、十一面堂院に、檜皮葺双堂二字とあり、長さ1丈5尺、広さ10丈5尺とある。二字、つまり2棟はいずれも長さ(間口)は同じで、広さ(奥行)の規模は非常に大きいので、2棟を一体とみて奥行を書いていることが分かる。

四王院にも檜皮葺双堂とあり、規模はやはり一

つしか書いていない。十一面堂院と同様、「二字」だが、建物の規模を一つしか書かないということから、2棟が一体とみられる形式をしており、その2棟一体の建物の奥行を書いたと考えられる。

さらに平安時代の薬師寺の東院にも、正堂のほか「前細舎」とあり、正堂の正面に細殿があることが書かれている。興福寺食堂院にも食堂と細殿があり、また東院にも檜皮葺の堂があって「前に細殿あり」と書いてある。このように、正面側に小さな建物、背面側に大きな建物

な建物が並ぶ建物が、古代寺院にはいくつもあったことが分かる。これらの文献を見ると、このような構造をとるのは、金堂のような寺院の中心建築ではなく、中心からやや外れた主要な建物であることに気づく。これを参考にすると、鳥海柵の建物も、鳥海柵全体の中心的な建物とは言い難いのではないだろうか。

れいに造ったというよりは、1ランク落ちるといふ印象を持つ。

こうした事例を参考にすると、SB01、02は軒先が接する形態の建物になるだろう。軒が接する部分には樋を入れて、雨水を流していたと想像される。建物自体は壁が2棟の外周を巡るなど、2棟を一体的に使っていたと考えられる。SB01は廂が広いのが特徴で、廂は屋根勾配が緩い板葺と考えた。建物の格が1ランク落ちるといふことで、SB01の身舎とSB02は茅葺きを考えてみた。(つづく)

登壇者

- コーディネーター 佐川正敏氏 (東北学院大学教授)
- パネリスト 千田嘉博氏 (奈良大学教授)
- 本堂寿一氏 (国史跡鳥海柵跡整備委員会委員長)
- 大平 聡氏 (宮城学院女子大学教授)
- 相原康二氏 (えさし郷土文化館長)
- 高橋 学氏 (秋田県埋蔵文化財センター副所長)
- 箱崎和久氏 (奈良文化財研究所都城発掘調査部遺構研究室長)